
ラブカクテルス その26

風雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その26

【NZコード】

N0966D

【作者名】

風雷人

【あらすじ】

今宵は珍しい味のカクテルをご用意しました。ご賞味あれ。

こりひしゃこませ。
どひやこひらく。

本日はいかがなさいますか?
甘い香りのバイオレットフライズ?
それとも、危険な香りのテキーラサンライズ?
はたまた、大人の香りのマティニー?

わかりました。本日のスペシャルですね。
少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は珍味でござります。

じゅわくづびわく。

あつしは鍋屋でやんす。

町じゃ、五本の指に入る老舗の鍋屋でやんす。
今夜は少し飲み過ぎたでやんす。ウイック。

さつきまで鍋屋の全国鍋屋商工協会の会員に出向いていたでやんす。
冬は鍋の季節。

そして全国鍋屋選手権の季節でやんす。

あちきりの地区は、このところ三年連続最下位でやんした。
そこで組合長が今年こやは、つてんで鍋が、いや、話しが長くなつ
ちましたんでやんす。

しかし、毎年同じ顔が揃つているわけでやんすからなかなか名案なんで出でくる訳なんかないでやんすのに、皆さん酒と鍋に熱くなつて、いやいや、今年こやはどうするかと熱くなつてでやんすね、こんなに遅くなつてしまつたんでやんす。

ウイック。

しかし、夜道は真っ暗闇でやんす。
いくら酔つ払つていろいろたつて薄きみ悪いでやんすな。

その時、後ろから冷たい風が突然強く吹いてきたんでやんす。

あつしは思わずびびつちまつたんでやんすが、その途端提灯の灯が
パツと消えちまつたんでやんす。

あつしは慌てて灯打ち石を出そとしたんでやんすが、本当に真っ
暗になつちまいやんして、そこで困つていたら後ろから灯を差し出
されたんでやんす。

これは有難いと、礼を言つて振り返つて見るつていうと、そこには
誰もいないでやんした。

でも灯り火が。

でもつてその火ときたら青白い。

あつしの背中は途端にぞーっとしたんでやんす。

その青白い火はゆらゆらと浮かんでるんでやんす。

まさかっ！

あつしは悲鳴をあげて走り出したんでやんすが、真っ暗な中、先な
んて見えやしやせん。

でも夢中で走りやんした。その時、何かに激突したんでやんす。

するつていうと、痛いつていう声が聞こえたもんで、申し訳ないつ
て謝つたんでやんすが、その声の主が真っ暗で見えなかつたもんで、
とりあえず後ろからヒトダメが追つて来てるかと、その人の背中に
回り込むと、何やらその人つていうのがヤケにでかいんで、暗闇に
目が慣れるのを待つてよくよく見てみると、それには一本の角と、
大きい目玉が顔の真ん中に一つ。

あつしは、あまりの出来事に腰を抜かしちました。

悲鳴も出ないくらい怯えていると、その妖怪はヒヨイツとあつしを
擒み上げて、うまそだから、なんて言いながら、大きく開けた口
の上に運んいくんでやんす。

あつしはたまりゅ、何とか声を出して言つたんでやんす。

待つたつ！

するつて言つと、その妖怪は手を止めて、モソモソとあつしに言つたんでやんす。

腹減つたからお前さんうまそつだから食べるかい。

あつしは必死で、自分なんぞはよくなんてないでやんすって言つたでやんす。

それを聞いた妖怪は少しあつしをジロジロ大きな皿玉で見始めたんで、あつしは何とかして逃げなきやつて思つて、言つたんでやんす。あつしなんて鍋のダシにもなりやしないって。

するつていうと、その妖怪は、あつしに鍋つてなんだつて聞いてきたんでやんすよ。

この鍋屋のあつしに向かつてでやんす。

あつしは頭にきて、鍋も知らないであつしを食おつてやからがあるかつて言つちまいましたが、あつしもこうなつたら引っ込みがつかなくなつちまつて、勢いに任せちまつたんでやんす。

鍋つてもんはこの世の中で、万人皆が楽しく温かくそして、美味しく食べれる料理でやんすよ。

大きな器に好きな具や、季節の具やらあまり物なんかでも入れ込んで、味噌でもダシでも醤油でも、はたまたお湯だけだつて構いやせんから、一緒に煮立てて頃合い計つて頂くでやんす。

その大きな器が鍋つて言つんでやんすよ、このトウヘンボク！

その妖怪は、あつしの切つたタン力に拍子抜けしたらしく、少したじろいだんでやんす。しかし、妖怪はあつしを小脇に抱えて、ノッシノッシと歩き始めたんで、あつしは足をバタバタさせてみたんやんすが、やはり逃げることは出来なかつたんでやんした。

あつしは結局、薄気味悪い洞穴へ連れて来られたんでやんす。

あつしはあまりにバタバタ暴れたもんで疲れちまつたんでやんす。

ここが年貢の収め時だと思いやんした。

かなり奥の方で妖怪はあつしを小脇から降ろしたんでやんす。

あつしは煮るなりなんなり勝手にしろと、大の字になりやんした。すると妖怪はそれは大きな、なんと鍋を出してきたんでやんす。

あつしは思つたでやんす。

さつきの話で妖怪めは、あつしを鍋物にするつもりだと。

あつしは、鍋屋が鍋で食われるなんて本望だと思いやんした。

そしてこれが最後と思つた途端、涙が出そうになりやんしたが、あつしは堪えて言つたんでやんす。

好きに煮やがれつてんだい。

そしたら妖怪の奴は、あつしに向かつていつ言つたんでやんす。

鍋あるから食べたいから作れないから。

何だ？ この妖怪は何を言つてるんでやんしょ？

ははーん、この妖怪はさつきのあつしの話しさを聞いて、鍋をつづきたくなつたんでやんすね。

あつしは寝そべつていた体を起して、とりあえず鍋を覗きにいつてみたんでやんす。

それはそれは大きな鍋でやんした。

あつしが見た中じや一番でやんしょ。

きつと百人分くらいはいつぺんにごきちまいそうな鍋でやんした。

あつしは考えたでやんす。こんなに大きな鍋で鍋物をやれるなんて鍋屋の冥利に尽きるつてもんだ。

あつしはその妖怪に、ここにある食べ物を全部出すよつて言つたんでやんす。

妖怪は意外に素直に頷くと、両腕一杯に食べものをあつしの目の前に持つて来たんでやんす。

あつしは腕を捲り、鍋を作り始めたでやんす。

食材は、見たことないキノコに、見たことない根っこ、見たこ

とのない魚に、見たことのない動物の肉、それに見たことのない調味料。

あつしは恐る恐る少し盆に載せては確かめたでやんす。

すると、どれをとっても、今まで口にしたことがない味と、香りに驚いたでやんす。

あつしは興奮したでやんす。

頭の中で味の組み合わせを考えて、スープを整えて、そしてきれいな盛り付けをしていよいよ鍋に火をかけてみたでやんす。鍋はグツグツを音を立て始めるど、いい香りで辺り一面を覆い尽くし、その香りに妖怪ときたら手を出さうとしてきたでやんすが、あつしは何回もその手を叩いたでやんした。

さてさて、そろそろ食べ頃でやんす。

あつしは最後に、うちの店の隠し味を入れたでやんす。

これは酒でやんす。

竹筒に入っていた酒を惜しきもなく鍋に注ぐと、何とも言えない香りが。

妖怪をみると、奴の顔はもうとろけていたでやんした。
ヨダレを垂らして、あつしの方をつらめしゃぶりに見ていたでやんした。

あつしは頷いて、目で鍋をシシリとを許すと、妖怪は凄い勢いで熱い鍋を抱えて食べ始めたでやんした。

美味いから、これ美味しいから。

そりやそうでやんしょ。なにせ、あつしが作った鍋でやんすから。
妖怪はそのうち、鍋一つ口ひとつ食べ尽くすと、今度はうとうと、寝始めたのでやんした。

シメシメ。あつしはここから逃げ出したことにしたんでやんす。しかししながら、少しだけ気がかりなことがあつたんでやんす。

それといつのも、実はあまりにも、妖怪の体が美味そつに見えていたんでやんす。

そう、何かとても艶やかで、透き通つていて、弾力があり、舌触り

がよせそつな。

あつしはつじつ、寝ている妖怪の体を摘むと、それがなんと、ポロっと何の抵抗もなく取れたんでやんす。

一口拌傭。かぶつ。

なんといつ歯応え。

コリコリと軟骨と、サザエやアワビの間くらこの丁度いい歯応え。
味はしつこい程無くして、ほんのり塩味。

これは鍋には持つてこいでやんす。

あつしは、もう一つ摘み、その妖怪から身を頂いたでやんす。

そうしたら、妖怪はいきなりイタタツと体を起こしたもんだから、あつしは慌てて逃げ出したでやんす。

いやー、しかし危なかつた。なんとか逃げ出したでやんすよ。クワバラクワバラ。

あつしは必死になつて逃げて走った手に、礼の妖怪の身を持つていたことに気付き、その夜は急いで店に戻つたでやんした。

次の日、あつしは早速組合長の所に出向き、話しひの一部始終を語つて聞かせ、例の妖怪の身を差し出して、一人で密かにそれを使つた鍋をこしらえてみるとしたでやんす。

そして出来上がつたその鍋は、たまげる程の絶品でやんした。

あつしと組合長はお互に向ひ合つと頷き、これで選手権の優勝はいただきだと、ヒンヒソ笑つたのでやんす。

狙い通りに、あつしらの地区は、組合発足以来初の優勝を果たしたのでやんす。

今回は妖怪の身のおかげで、それに合つスープ作りなどじを、組合員たちが寝る間も惜しんで努力して取り組み、この味で興奮した全員が今までにないくらい高級な食材なども、協力して集めてきてくれ

た結果でもあつたんでやんした。

組合長を始め、全員がその優勝に歓喜して、その夜の宴会は大盛り上がりでやんした。

噂じや、あの鍋物は近々殿様にも献上されることになり、選手権が終わるやいなや、たいそう立派な馬車がその鍋を運んでいたでやんした。

鍋屋冥利に尽きるつてもんでやんす。
めでたいめでたい。

ウイック。

いい気分でやんす。

あつしはご機嫌で、夜道を千鳥足で歩いてやんした。

そういうや、あの妖怪と会つたのもこんな夜でやんした。

そんな事を思つて歩いていると、いきなり強い風が吹いたと同時に提灯の灯が消えて真っ暗になりやんした。

そして、どこからともなく声がしたでやんす。

美味しい鍋食いたいから。

あつしはキタキタと、この間の詫びと礼を言つつもりで周りを見渡し、大きな声で出でてくるよつて言つたでやんす。

すると、何かあつしの体が変な感覚に襲われたでやんす。
はて？？

あつしは懐から火付け石を出して提灯に火を入れて自分を照らしてやんす。

するつていうと、あつしの体は、体はみるみるうちに透明に透き通つて、何とも美味そうになつたから、どうなつてるかわからないでやんすが、食べ頃だから。

あっしは、じうじて妖怪の腹の中に収まつたでやんす。

あっしはため息をついて今までの人生を振り返つたでやんす。

あっしは小さくづくまつてしまつてしょげていたでやんす。

すると、後ろから誰かが肩を叩いたでやんす。

えつ？と思い、振り返ると、な、なんと組合員ー！

その後ろに続々と組合員のやつまで。

あつ！選手権の審査員や隣のおばちゃんやおじちゃんや、おとうやお袋、婆さまや爺さまや、あっしの好きな隣町の鰯屋さんの娘さんや、ヒ、殿様までー！

こりゃていへんだつ！鍋つぐらなきゅつ、でやんすー！

鍋は大勢でつつかなきゅでやんすつ！

あっしは妖怪の腹の内側を摘まんでみたんでやんす。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ち申し上げております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0966d/>

ラブカクテルス その26

2011年1月26日04時51分発行